

<企画3：未来展望 これからの社会教育に望むこと> 対談 デジタル活用 普遍性のある社会教育への展開

テーマ：この対談は、社会教育と生涯学習の関係を中心に、社会教育雑誌の歴史、デジタルミュージアムの重要性、社会教育士の役割、グリーフケア、批判的思考の重要性など多岐にわたるトピックを扱っています。特に、デジタルアーカイブの活用や教育のデジタル化が強調され、社会教育が生涯学習社会にどのように寄与するかが議論されています。(AIの要約)



対談者 元本誌編集委員・社研OB・日本デジタルアーキビスト資格認定機構理事 坂井知志
元本誌編集委員・社研OB・若者文化研究所代表 西村美東士

※社研：国立教育会館社会教育研修所（現：国立教育政策研究所社会教育実践研究センター）

[司会] 本誌編集長 近藤真司 3月19日（水）15:00-17:00（日本青年館5階会議室にて収録）

坂井 知志（さかい ともじ）

東京都出身 1953年生まれ

社研→文部省、文部科学省→常磐大学→現在

学生時代、青少年教育に興味を持ち、子どもたちのキャンプカウンセラーとして春夏秋冬のキャンプを企画・実施して充実した時間を過ごす。そのこともあって学校教育を含めた教育全般に携わる事を夢んでいた。

縁があり、国立社会教育研修所に勤務することになり、一生で一番学ぶ時間を過ごせた。それは、興味ある講師の話は聞き放題、その後講師の本は読み放題という贅沢な時間を持つことができ、徐々に社会教育全般へと興味が広がった。そのような自主的な学びを許容する職場環境に今では感謝している。その後、企画の仕事を中心に過ごせ、教育の情報化に全力投球。さらに、大学の教員になり東日本大震災のアーカイブ作成の監修やフィリピン移民の調査や現地の博物館作りに関わった。

現在は、沖縄に移住して琉球をさらに魅力的なところへと気がついたことを実現するための「会」を近々立ち上げ、琉球の人々と他県、そして世界中の人々が交流し、集えることを目的とした活動を始める。これは、国立社会教育研修所で学んだことの集大成である。

西村 美東士（にしむら みとし）

東京都出身 1953年生まれ

社研→昭和音楽短大→徳島大学→聖徳大学→現在

東京都青年の家では、それまでの趣味を生かして、ディスコ大会や情報講座を開発した。当時の情報提供に関わる論文が評価され、社研に採用された。

社研では、高い専門性の先輩方、議論漬けの同僚、愛すべき現職受講者と交流し、講師との一対一の接遇からなまの刺激を得た。

また、坂井さんとのバレーボールからスポーツの楽しさに目覚め、小学時代受けたいじめのトラウマを解消し、「体育会系の人にもいい人がある」(笑)という認識転換ができた。

社研時代は、公民館長になって毎晩、フリースペースを実施するという夢を持っていたが、縁あって大学教員の道に進んだ。

そこではある本から、「大学でも楽しい授業をやっているのだ!？」という有難い認識転換を得て、社会教育の娯楽性や双方向性の楽しさを存分に発揮することができた。今は、若者文化研究所を開設し、論文作成やワークショップの支援をしている。

テーマ1…生涯学習社会とは何なのか？

1991年当時の生涯学習の振興のねらいは「学歴偏重社会の是正」

学歴社会への挑戦と挫折 仕事、生業とつながる視点が欠けていた

近藤 今回の雑誌『社会教育』創刊950号の特別企画ということで企画しました。この雑誌を私が担当を始めたのが1991年4月からで気が付くと34年目です。実質、通巻540号（1991年6月号・特集「生涯学習の評価」）からなので410冊を担当してきました。

1990年のころ、お二人はどういうお立場でしたか。臨教審が終わって、89年に千葉県幕張で第1回全国生涯学習フェスティバルが行われ、生涯学習の風が吹いていてマスコットの「マナビィ」が誕生しました。

坂井 ちょうど全国生涯学習フェスティバルをやるときは、私は文部省社会教育課の専門職員かな。フェスティバルで走り回ったのを覚えています。ピアノ数百台の連弾とか。それはそれで、教育というよりは学習、楽しい学びっていうところの意味はあったと思うのですけれども、青少年、社会教育の積み重ねが一挙にそこで後退した時期で。当然、物事つ

ていうのは功罪があるので仕方がない部分はあるのだけれども、私としては両面やりたかったなと思います。高齢者プログラムの開発プロジェクトを社研（国立教育会館社会教育研究所）のほうにお願いしたりして、社研と文科省のつながりの役をやっていた時期。

西村 そうか。僕が社研から昭和音大に行っちゃった年ですね。

近藤 2023年8月10日政府はリスクリングなどの「人への投資」に「5年で1兆円」を投入する方針のもと、リスクリングを進める個人や企業への助成を拡充していますが、実際に公民館で「リスクリング」関係の取組はほとんど行われていません。それはなぜなのでしょう。

34年間、雑誌「社会教育」通して見ていましたけれども生涯学習と社会教育がつながっていないんです。社会教育が「施設型の公民館、図書館、博物館」に、どんどん小さくなっていった。

※文部科学省資料（第11期中央教育審議会生涯学習分科会における議論の整理【概要】「参考資料1」…〈生涯学習〉「個人」の生涯にわたる自己実現を図る学習…〈社会教育〉学びを通じた「人づくり・つながりづくり・地域づくり」

一方、大学が公開講座を含めて、リスクリングとかリカレントに対応しているとかというところでもなく、「ニーズ」に応じたプログラムというよりも「教授する側」優先のプログラムをやっている傾向が感じられます。

創刊950号記念企画なので、その空白のところをどういうふうにつなげていくかを考えてみたいと思います。子どものころから職業教育の「動機づけ」がないまま何となく「どころてん式」で卒業になって。生涯学習の視点からは、卒業後、生きていくためには学び直しも学び重ねも必要なのです。



西村美東士さん

企画3：〈対談〉未来展望 これからの社会教育に望むこと

そういうところをもう1回見直して。950号からの50号、どういう積み上げ方をするか。この雑誌はどのような機能と役割を持つのか。この企画をリスタートのきっかけにしたいと考えています。生涯学習振興法スタートの時点（1990年ころ）に立ち返り、最初に「生涯学習社会って何なのか」ということについてお願いします。

西村 今は職業教育を専攻する人が結構私の周りに多くて、技術・技能教育研究所でのOTとかOFEITとかに僕の関心が広がっています。僕が「生涯職業」という言葉を使ったら、その仲間から「そんな言葉はもう勘弁してくれよ」と言われた。生涯にわたって職業をやるわけじゃない。そうではなく、「職業生涯」、これがその人にとっては大事なことになる。一人ひとりにとっては。

子育ての時期も大事だし、花の人生の大事などころってというのが幾つかあって、それぞれが大事で、ある意味それはもう切実な学習課題。だけど、OT、OFEITをまともにやっている企業なんて本当に少ないですよ。ちゃんとそういう分析をして教えてくれるわけではないから。だから、それはやはり取り残され

ているわけです。たくさん取り残されている。「誰一人取り残さない」といった、空疎なスローガンがいけないと僕は思っています。一億総活躍とかいっても取り残される人がたくさんいて、それは何とかしたいと思いますね。

近藤 そうなんです。この雑誌担当者として、34年前の最初の疑問がそこなわけですよ。

テーマ2：西村方式 カードの活用

クドバス（CUDBAS） 構造化

坂井 西村さんは大学でどんな授業をやっているのって私が聞いたら、カードを持たせて、わからないとこのカードを出したりして、何人かいるともう一度説明したりしているって※。

※『生涯学習かくろん』（1991年初版 西村美東士 学文社）

西村 わからないと黄色を出すとか、反対だったら赤色を出すとか。

坂井 それは宮本一さん（社研専門職）が好きだったアナライザーだね。アナライザーよりずっといい。ボタンを押すより、赤いカードを出したほうがいい。反応を見ることすらしないですと1時間、1コマ話してしまうということが

やっぱり良くないような気がする。

西村 良くないでしょうね。それは。

坂井 私も西村さんの教えを受けて最初の10分レクチャー。で、その後20分検索して、学生たちがどんな検索をしているのかを、パソコン教室では全部こちらで把握できる。要するに反応見ながら講義をしていくというやり方。

西村さんは大学の教員になってそういう授業をやっているところが、私のヒントになっているのです。やっぱり一斉の講義だろうが、一人ひとりを見ていくっていうことを大事にすることを全てのことの価値として貫いたほうがいいと考え



坂井知志さん

ている。

西村 職業教育の話ですが、クドバス (CUDBAS) ※、それはその現場の人たちが自分たちはどんな能力が必要かっていうのを出して、人材育成を組み立てるんですよ。

※参考資料…「工場発。この〇×が技能継承の壁を突破する」 凸版印刷クドバス・コアラートプロジェクト「編著」職業能力の構造に基づくカリキュラム開発手法 CUDBAS クドバス

誰だっという仕事をしたいと思ってる。つまり、見て学べとか言って、よくわけの分からないこと、あるいは社長の精神的な訓話みたいなものばかり与えるのではなく、本当に必要な能力が構造化されて見せられれば本人は主体的に学ぶことができるだろうと。

もっと広いいろんな方向に発展する楽しさとは違うけれども、その職場で必要な人材になっていく。それは誰にでも幸せなことである。こういうふうには僕は思っていて、それは学生にやっても面白いし、そういういわば「教育クドバス」もやりたい。それはオンラインの Google ドライブを使って共有することも今はできますけど、できればカードでみんなです

し合ってやるほうがいいです。

テーマ3…生涯学習と職業能力開発可能性を広げる

坂井 要するに生涯学習の幅にはそういう職業教育って、学習情報課長をやった岡本薫（『入門生涯学習政策』の著者）さん……初めて課長に来たときに、「坂井と言います」って言ったときに、「知ってます」って言って、「あなたは職業教育を生涯学習の中に入れて書いてますよね」って言うから、「私は職業教育が生涯学習の一分野として非常に大事だと思います」って言ったたら、「私もそう思っているんです」と。

だけど、生涯学習関係者は「実はあまりそういう意識がないので、そこへの掘りがないですよ」って岡本さんが言われて。「私もそう思います」って言った。

西村 もうけることとかそういうことから離れるっていうところに自分たちの位置を見出しているんだな。社会教育がそこから離れちゃう、きれいな世界ですよっていう。

徳島大学で、何年間もボランティアをやっていた、今は「FMびざん」ってい

う、その地域のコミュニティラジオ（コミュニティ放送局）をやっている若者なんだけど、単身赴任で一人住まいしていた僕の家に居候していました。彼に言われたのは「ボランティアじゃなくなっちゃった。何で起業とかそういうのを勧めないんだ」って。社会教育では NPO とかボランティアとか、そういう非営利ばかりだけれど、起業、会社をやったって世の中の中で立つんだよって言われた。

坂井 教育でマーケットとかいう話をすると、けしからんっていう人がいる。聖域なんです。だからそうではなくて、経済のことを教えるっていうことはいかに自分の生活をちゃんと自律させるかっていうことが大事。それを教えないといけない人が、「金もうけのためにおれたちはやっていないのに、パソコンを導入するのは金もうけのためだろう」と言っていて、「安くしろ」っていう値引き交渉する人があるんだ。とんでもない話だよ。適切な価格で商売をやるという人たちの尊さをまるつきり分らない人間が経済を教えているっていうのが不幸だよ。

西村 そりゃそうだ。

坂井 だから職業教育がいかに大事なのかっていうのと、実は政治活動ももうけ

企画3：〈対談〉未来展望 これからの社会教育に望むこと

することも公民館活動で禁じていないって
いうことを分かっていない。政治だつて
良くならないんですよ。

モチベーション研究っていうのをネッ
ト検索すると、ほとんど理科を面白く教
える方法とか、歴史を面白く教える学校
教育のモチベーション研究ばかり。そう
ではなくて、生涯学習、社会教育、青少
年教育はさまざまなステージがその人の
学ぶきっかけになるところに着目をして
モチベーションを持って、映画を見たい、
今までは仕事もあり介護のこともあり、
自由な時間がなかったので落語をゆつく
り聞くこともなかったとか、そういう人
たちがさまざまなところで学べることを
立派な学習だつていう雰囲気は社会全体
が持つていけば、西村さんが言われる、
何か地位を得るための学習が学習である
っていうのではなくて、本当にその人に
必要な学習ができる。そういう社会にな
ってほしいよね。

テーマ4…公務員とは

専門性 プロフェッショナルとして矜持

近藤 本誌87年9月号（41～46ページ）
に坂井さんの名前が、高齢者事業の紹介
（「特色ある高齢者教育事業一覧」当時

国立社会教育研修所専門職員」）に出て
きているんです。

坂井 1989年時点の文部省生涯学習
局社会教育課長の沖吉和祐（おきよし
かずすけ）さん「本誌1989年7月号
15～27ページ 家庭を地域を、そして学
校を変えよう！ 対談相手 伊藤政子…
弁護士」が面白いのは、一度決めたこ
とでも変わる必要があるっていうことに
ついて果敢に変えていくんです。どんど
ん変えないといけないっていうところは
沖吉社会教育課長には強くあつて、それ
はそれで面白かったけれども、その時に
は社会教育研修所には大変ご迷惑をかけ
たなど。

西村 いやいや。

近藤 沖吉さんが筑波技術短期大学副学
長※のときに、社会教育課長として振り
返つてということとで原稿をお願いして、
こちらの雑誌に紹介した記憶がありま
す。

※本誌2000年11月号6～9ページ
「社会教育施設の現代的課題に関する一
考察 『二一世紀社会教育ルネッサンス』
を目指して」

坂井 その時私、大学に行っているんで
す。沖吉さんを訪ねて、さまざまな障害

を持つている学生が社会に出るためのい
ろんな開発をやっている先生たちがい
て、しゃべったものをすぐテロップで出
す。今では当たり前になっているけれど
も、そういうものを開発して、視覚障害
者、聴覚障害者両方の障害を持つている
二重苦、三重苦の人たちにどのように教
育を届けるのかっていうことをやってい
た大学※なので、伺っているんな研究室
を訪ねさせていただきました。

※参考「身体に障害のある社会人に対す
る生涯学習の在り方に関する調査研究」
（1998年文部省委嘱）

沖吉さんは先を見るんですよ。国立科
学博物館次長のときに日本ミュージアム
マネージメント学会の席上でおっしゃら
れたのが、「建物がない博物館がいつか
出てくるから、その時に備えるべきだ」
という話。場合によっては「展示物も要
らないのかもしれない」と。「全部デジ
タルの時代が来るよ」ということをおっ
しゃられていた。千葉県大網白里市デジ
タル博物館☆が建物を建てる財政的な力
はない、でもやっぱり地域の資料を今の
人たちにも将来の人たちも使ってもらい
たいというのでデジタルミュージアムを
つくつて、それがこの前、登録博物館に

なっただけですよ。

西村 学芸員はいるの？

坂井 中心になっっている人は本当の地方公務員。学芸員資格とかではない。学芸員は学芸員で別にいるんだけど、中心になっただけで引張っている武田さん（大網白里市教育委員会副主査・学芸員武田剛朗）は公務員。私は「学芸員だからとか図書館の司書だから専門性がある」とは思っていないんです。

西村 なるほど、そうだね。

坂井 要するに人を見ないといけない。ポジションとか肩書きではなくて。この人は何を考えているのか、何をしようとしているのかっていうところで公共性が決まってくるので、公務員だから公共性があるなんて甚だおかしい状況になっていると思うので、そういう意味では武田さんっていうのは本当に公共性を考えて仕事をし続けているなって、面白い人だなって思っています。

西村 そういう人もある意味、専門性なんです。

テーマ5…自己啓発がよりよい仕事につながる

ネットワークを持つことの重要性

坂井 公務員で過去のことと未来のことも考えないのは使えない事務職員。公務員で一番大事なことは自学自習すること、勉強会とか人のネットワークを持つていないことは公務員としてまともな仕事ができない。70歳を超えた私でも、夜9時からのオンライン、ZOOMの勉強会をし続けているのに。働き方改革も大事だけれども、仕事を面白くするために自学自習して、自分たちの組織が見落とししているもの、サービスが届いていないところがあるのか。不登校にもあるし、DVの被害者にもあるし、そこへ教育をどうやって届けようかと。

私は文部科学省学習情報課の時代に、当時の佐藤次官（佐藤禎一（さとうていいち）元文部事務次官）が、「不登校にあなた方がやっている衛星のネットワークは届けることができるのか」とか「情報化の写真を描いてくれ」と言われて、文科省の情報政策は政策課がやっていたのを学習情報課に剥がして持つてこられた。で、学校教育もいろいろそこに活用しなければいけないし、教員の研修もそこできないかっていうのは当然あった。けれども、それだけではなく佐藤次官の中には不登校があると。だか

ら、国家公務員としての木田宏（元文部省事務次官）先生、井内慶次郎（元文部省事務次官）先生（本誌2004年10月号 創刊700号座談会23〜38ページに登壇）や、優れた人たちがいるけれども、私は佐藤次官も優れた、全体を考えて一生懸命仕事をされた方ではないかな。こういったのが、公共性が高い公務員だと。

テーマ6…社会教育があつてこそ社会教育行政

社会教育研修所の役割 なぜ社会教育行政に特化したかは不明

西村 そうだね。それなのに、社会教育の弱体化とか青少年教育の衰退とか危惧されるよね。どう捉えればいいのか。

坂井 元気な人たちはいるので、西村さんも私も勤めていた60周年を迎えた国立社会教育研修所では設立1年目、青少年の指導者とか社会教育の指導者、地域の指導者を集める研修があった。2年目からなぜかなくなった。一生懸命調べたけど。

要するに、社会教育法には講座の実施、情報提供は行政がやること、国や道府県や市町村がやるのが書かれているけれども、一方で社会教育を行うものに対

企画3：〈対談〉未来展望 これからの社会教育に望むこと

して支援、援助をするっていうものが文書に書かれているわけです。けれども、社会教育研修所は、1年目はその両方をやるうとしたけれども、2年目から行政のプログラム開発とか社会教育計画の立案の手法とか、そこへ振ってしまっただすよね。

西村 その間に違う世界で、学習っていうのに関心があつて研究していくっていう、そういう研究成果がたくさん出ている。社会学とか、ああいう人たちから。社研でもそういう一人ひとりの学習とかに目を向けた研究をもっとすればいいのにね。

テーマ7…現代的な課題をどうする？

社会教育と社会教育行政の異同・違い
坂井 おそらく、社会教育と社会教育行政が一体になって青少年教育も不登校のことも、学校教育以外の教育活動全体を包括するっていうイメージから、今、社会教育行政っていうのは図書館、公民館、博物館とかそういう施設単位で行う講座とか、そういうことに矮小化されている。だから東日本大震災が起きたときに、防災教育を私は社会教育でもっと取り上げるべきで、社会教育だけじゃない、さま

ざまなところでやればいいけれども、各地でそういう話をしたときに、「坂井さんの言っているのは社会教育行政の枠を超えている」。社会教育行政の今やっていることからいうと超えているけども、社会教育であるんです、と……。

ある県のシンポジウムで社会教育と社会教育行政は「イコールではない」って言ったら、菊池龍三郎（元茨城大学学長）さんがすぐ横にいて、「そのとおり」って言われました。そこが混同されているような気がするんですね。だから西村さんが今おっしゃられたようなことで起きていることは、実は国にはあんまり知られていない。知っていない。

西村さんがずっと情報化のこと、青少年のことにこだわっているんな仕事を重ねられていったけれども、彼らは「それは社会教育行政じゃない」とか言い出すわけですよ。情報化ですら、最初は、それは社会教育課ではないとかそういうスタンスだったんです。

近藤 確かにそうですね。だから、私が1991年にこの編集部に来て、編集委員会をやつて、会議の「灰皿」を撤去しました。もともと走る仲間のスポーツマガジン「ランナーズ」でスポーツ（市

民マラソン）大会を担当していて、スポーツのネタを提案すると大御所先生からそれは社会教育ではないと……。

坂井 そう、ある県で東日本大震災を受けてシンポジウムが開催されて、司会が菊池先生。で、東日本大震災で各地を私が調査していたので、そこで登壇してくれて県のほうから頼まれて、県南生涯学習センターでシンポジウムをやった。菊池先生は本当に茨城のことを中心に丹念に仕事をされていました。社会教育行政と社会教育が異なることは明確にされていた。菊池流。

近藤 すぐく分かりやすい文章で書いたのが、ネットにPDFがあります※。

※（「社会教育の内容と方法・形態2011年7月20日 国立社研 茨城大学名誉教授 菊池龍三郎」

https://www.nier.go.jp/jissen/01/h23/ejme/pdf/7/01_gaion/kuchipdf

テーマ8…公民館のデジタルアーカイブへの対応は？

デジタル社会における社会教育の意味
西村 東大の社会教育研究者の牧野篤さん（2025年4月から大正大学教授）。他省庁が公民館について関心を持ってい

るっていう、だから公民館はそのプラットフォームとして今でもすごく重要な役割を果たせるんじゃないかと。今後ね。

坂井 私はデジタルアーカイブっていうのを最後の仕事と思って取り組み始めたんだけど、公民館が地域の祭りだとか地域の青年活動を一生懸命やっている人の記録がどこにも残らない。それを公民館に残したらどうかっていう話をしたときに、公民館全体の反応が悪いんです。仕事が増えることは公民館はやりたくないで、公民館主事を中心にやることは無理な話なんだなって思いました。

西村 でも国立青年の家とか研究集録でどんどん活発に出していた時期もあったじゃない？

坂井 廃止の方向だけだね。

西村 そう。東京都も廃止しちゃったし、その頃に「青少年問題文献集」づくりに関わって、関係資料に要旨を書いていた。あれは2002年で国はやめちゃったんだけれども、そういう収集と交流と、研究を深めるっていう、環境が悪くなってきたのかな。やる気もないのかな。

坂井 そこはね、なかなか言い難いんだけれども。基本的に、私は一時期、貧しさへの準備教育っていうのが必要だと言

っていた時期があります。先ほど言われた沖縄とフィリピンの関係で、フィリピンのミンダナオとかパナイ島とか。パナイ島に博物館をつくって館長になったりしたんです。

中国残留孤児の問題、当時の文部省のまとめは社会教育課だった。それで、私が担当なので中国残留孤児の問題を勉強しました。そうしたら、フィリンにも残留孤児の問題があるということが大学へ出た後に分かって、本当に不勉強だったなって思いました。その人たちがいかに苦労したのか。フィリンに行つて、その残留孤児の人たちの話を聞いて、すごい経験をされてきたんだなと。そこに對して、国籍をはっきりさせないと日本の国籍は認めないって、長く日本はやってきた。

フィリンのパナイ島のイロイロとマーシンという場所で集団自決があった。その半分の人が沖縄の人であつたことがわかり、たびたび沖縄に行きました。ある小学校の100周年かな、記念誌で集団自決の経緯が書かれているのがようやく見つかつて。で、向こうの博物館にパネルをつくったりしました。で、フィリンと沖縄は行ったり来たりして。大学

も日系人会を中心に私たちがお金を出して、向こうにミンダナオ国際大学っていうのをつくって。ブラジルも大変苦労したけれども、ブラジルは博物館をつくった。日系の博物館をつくったんだけど、フィリンは博物館をもちろんつくって大学までつくった。多くの日本人は知らない。

いかに苦労したのかっていう話を聞くと、これを埋もれさせていいのかと。それでデジタルアーカイブっていうもので、どこにしようが私たちの先輩方、若い10代から20代前半の人たちが、沖縄でいうとソテツ地獄っていう。ソテツを食べないと生きられないっていうような世界恐慌の中で、貧しい沖縄が移民をたくさん輩出して、そこに第二次世界大戦が起きて、さらに苦労されて、一人ぼっちになつてしまった人たちのことを残すのにはデジタルの力を借りないとしようがないということはずっと考えていました。いつ予算がカットされるかわからない公民館や図書館、博物館でなく、地域の社会教育が担うことが良いと考えています。

企画3：〈対談〉未来展望 これからの社会教育に望むこと

テーマ9…デジタルアーキビスト×社会教育士

社会教育士のカリキュラムに情報化がない

坂井 デジタルアーキビスト（本誌2016年9月号特集…デジタルアーカイブと社会教育施設14～19ページ 井上透「社会教育施設におけるデジタルアーキビストの役割 地域の文化資源を社会基盤化し共有・発信する人材育成」）という人材養成が必要だと思って、今、8000人以上の人たちがその資格を持っています。私は、社会教育士はもっと改良が必要だと思うけれども、社会教育士のカリキュラムをつくったら、もう次の年から本当は変更していかないといけない。現在のカリキュラムには情報化がない。情報化を進めようと思ったら著作権、肖像権、個人情報の問題をなくしてはできない。それを社会教育士のところに盛り込むよりは、社会教育士の資格を持った人がデジタルアーキビストの講習会を受けたほうがいいんじゃないかと。西村 そうですね。

坂井 お医者さんも受けているんです。何でお医者さんが受けているかというのと、自分の患者さんが亡くなると、この世にいたことが全部消されてしまうと。

それではいけないんじゃないかと思って受講しました。宗教団体の人たちもいる。それから博物館の人、図書館の人は受けるけれども、社会教育士は今のところ受けていない。社会教育主事も受けていない。社会教育が完全に社会の中のニーズと乖離してしまっている。

西村 縦割りの圧力を受け入れすぎちゃった。

坂井 もっと柔軟に考えればいいんです。行政を変えるのには時間がかかるので。行政は今のところこんなもんだっていうふうに考えて、何が足りないんだろうっていうことを考えて、そうすると、青少年教育振興するのにオンラインではなくみんなを集めるという青少年活動ばかりじゃない？夜の9時に集まるのに北海道の人も沖縄の人も、参加可能なのはオンラインですよね。先日のデジタルアーキビストの講習会には、ペルーの人も受講したんですよ。日本人ですけどもね。ペルーにいる人もオンラインで入ってこられる。そういう時代に時間的制約、距離的制約を超えて、どこにいても青少年教育活動ができる、生涯学習活動ができるという社会が来ている。

集まるのが一番いいに決まっているん

です。だけど集まれないときにどうするかということを考えれば、情報化を受け入れざるを得ない。だから、集まっている人と集まっていない人がいてもいいし、いろんな形があってもいいはずなんです。

西村 引きこもりの若者たちをどういうふうに自分たちに取り込むか。オンラインだと途中で退出することもできると。そこがありがたいって引きこもりのケアをやっている人たちは言うんです。そういうのは、社会教育の人は受け入れがたいかもしれないね。

坂井 社会教育行政のところに近い人たちは受け入れにくいんだけど、社会教育、青少年教育活動をやっている人たちは、もうそんなことを言っていないので、仕事の合間に、30分後に集まらないところに行こうと思ったらオンラインがあります。

西村 そうだね。

テーマ10…エリアを超える意味は

情報化ツールを使えばどこにいてもいい学習環境

坂井 これ、iPhone16。これとパソコンとどっちが音質がいいのかっていう話を

したら、若い人たちはPhoneのほうがいいっていう。

西村 聞き慣れているってこと？

坂井 そうするとある意味、どこにいてもいいんです。ペルーにいてもいい。ペルーにいながら社会教育とか青少年活動の集まりに参加できる。私は一番そのことを考えたのは、国立科学博物館の企画課長をやったとき、年間400から500の事業をやっていましたが、ナショナルセンターなのに集まれるのは文京区、台東区ですよ。それはおかしいと。ナショナルセンターであれば離島の子どもたちにも、私たちがやっているものをどうやって届けるのか。移動ミュージアムとか貸出標本キットの充実っていうのは、その当時考えました。今であれば文句なくオンライン。そうすれば、種子島で青少年の科学体験をやりたいという子どもに対して科学博物館の研究員の話とかを届けることができる。

フクロウは羽に消音装置が付いているんです。それを見せながら、どうして消音装置が付いているんだらうと。夜、ネズミを後ろから捕獲するために、音がすればネズミは逃げちゃうから消音装置が付いている。そういう話を彼らは面白く

話すんです。好きだから。自分が子どものときになぜ鳥に興味を持ったのかとか化石に興味を持ったのか、その話を文京区、台東区にやっているばかりであれば「文京区立」なんです。そうじゃなくて、ナショナルセンターならば、集まれる子は集まればいい。でも、種子島にいる子に航空運賃を出して上野まで来なさいっていうスタンスだけでいいのかっていうことに悩まないといけないんです。

西村 奈良国立博物館とか千葉にある国立の……。

坂井 千葉県佐倉市の国立歴史民俗博物館。大阪府吹田市の国立民族学博物館。

西村 そうか。あと文化財。それが結局、栃木県佐野市の社会教育と一緒にやっていた人が言っていたけれども、学芸員が自分の研究材料として書庫に閉じ込めちゃうわけです。一番大事なものを。彼は社会教育主事兼学芸員として、そういうものを子どもたちに開放していくっていうことをやっていました。このような閉鎖的風土で、デジタル化はすごく進んでいるけれども、あまりオープンになっていないですね。

坂井 国立民族学博物館の初代館長、梅棹忠夫館長。梅棹さんは「展示ケースに

入っているのも許せない」。要するに、博物館じゃなくて「博情報」って言った。情報をその利用者に届けて初めて博物館の意味があるって。物ではなくて情報を利用者にどうやって届けるのかっていう。ところが、博物館が薄情っていうイメージがあるので、その後は、「博情報館」って言い出した。ケースから解き放つ。

国立科学博物館の諸沢正道館長(当時)も、「体験展示」っていうのを言いました。サンフランシスコのエキスポラトリウムっていう科学館がクックブックとスナックブックというのをつくった。クックブックを世界中に配布して、いろんな科学展示を、著作権を主張しないので、皆さん方、これにヒントを得て科学展示をやってくださいと。スナックブックは科学体験教室のプログラムをオープンにして、みんな世界中で科学体験を進めてくださっているものをつくった。それはナショナルセンターじゃなくてサンフランシスコなんです。

だからもう国だから、公的なものだからっていうことじゃなくて、そういう公共性が高いことに対して支援していくというところで、不登校の子どもだろうがD

企画3：〈対談〉未来展望 これからの社会教育に望むこと

Vだろうが、さまざまなダメーシケアを生涯学習でやろうとすることに支援をすればいい話で。言いたいことはたくさんあるけれども、役所のできないことをあんまり言い続けても生産的ではないので、OBとしてはやってほしい。公共性の高いことに着目してスキームをつくってほしいと思います。

イギリスの子どもホスピスに賛同した人が横浜で自分たちの手づくりで子どもホスピスを始めている。小児がんで助からない子どもたちを集めている。そういう公共性のあることを役所が「やれ」っていうよりは、やっている人たちに對してどうやって支援するのか。それから、入っている子どもたちが科学体験をしたり、絵画や音楽を体験したり、音楽には著作権料を払わないといけないっていう問題があるのでその支援をするとか、そういうことは公共がやればいけないけれども、主になっっている公共性の高い事業を、「おまえらやれ」っていうのは、もう期待できないんじゃないかなと。

西村 行政が無理にやるのではなく、せっかくそれをやっている市民たちがいるわけだし、そちらのほうを応援していくっていうことかな。ただ、もう一つその

情報化の中で、地域の高齢者とか、その中の地域コミュニティのつながり、そういうものも一方で大事だと思うんですが、どうだろう。

坂井 地域コミュニティというのは大事だと思うんだけど、当然メリット・デメリットがあるわけです。私は茨城の大学に19年間勤めて、茨城の人って本当に正直で誠実な人が多いな。普通に友人として付き合うのにはとてもいい。でも、茨城以外のことに実はあんまり興味を持たない。閉じこもる。そういう人に必要な学習っていうのがあるんじゃないかと思っています。

当然、茨城でも一つには語れない地域性っていうものはあるんだけど、西村さんは西村さん、私は私の得意不得意と良い部分と嫌な部分というのがあるわけじゃないですか。で、良い部分はどうやって伸ばそうか。で、駄目な部分をどうやってフォローしていくのか。地域の学習が大事だっていうと、いいところばかりを言われる方が多過ぎる。

私がこれから関係をつくらうと思うている沖縄の人たちも、島と本島ではまた違うし、本島的那覇市と読谷町ではまた違う。いろんな問題があるんだけど、

いいことばかりじゃないんです、地域っていうのは。ある意味修正したほうがいいことを他の地域でやっていけば、そことオンラインをつないでいるうちに変わってくる可能性があるんです。

でも、「あんたたち、ここは悪いよね」っていう講座をやっても集まりもしないし、終わった後に不愉快になるだけなので、やはり人と人が交流することによって、そこでだんだん自分たちで気付くっていう……、スポーツをやりながら気付いたり。

沖縄にバスケットのプロチーム（4月号44ページ参照「琉球ゴールデンキングス」）があります。素晴らしいバスケットのスタジオがある。茨城にもプロのバスケットチーム、ジュニアがある。そこが交流するということを重ねていく中で茨城県民は茨城のいいところ悪いところに気が付いてくれる。で、沖縄は沖縄でいいところと悪いところが当然あって、ずっと同じところにいると地域性っていうのがかえって見えてこないの、その地域によって立つという大事さは伸ばせばいい。けれども欠点に近いような状況をどうやって地域が克服するのかっていうのは、まさに実際に交流すること

と、それを継続的に交流を続けるためのオンラインを使いながらやっていく時代に入ってきた。そういうことを沖縄で、これから70歳を過ぎた私が向こうに団体をつくって始めようかなと思ってます。

テーマ11:「MDGs→SDGs」

一人も取り残さない？

西村 SDGs、その前のMDGs（ミレニアム開発目標）※、その時にはもつと「健康問題」に関する項目があったんだけど、SDGsでは減っています。そして、SDGs自体も目標達成は無理だろうって言われている。僕は「誰一人取り残さない」とか、パーセントじゃなくて「一人も残さず」というのを目標と言えるのかって疑問を持っています。

（※注：MDGsは対象が発展途上国だけであつたり、取り組み主体が政府主導であつたり、地球環境や経済に関する目標がほぼカバーされていなかったりと、その内容は限定的。結果として、ジェンダー平等や貧困、飢餓などについて課題を残したため、より包括的な目標とするためにSDGsが設定された。）

健康の問題についても大事なことは、

健康っていうのを社会的な視点とか国際的な視点で見て広げていくっていうことが大事だよ。だから、コミュニティでも、閉鎖するんじゃなくて外に向けたコミュニティ。そういうものが大事なんだと思う。

坂井 そう、そうだと思う。

西村 柳田國男が書いている……。

坂井 民俗学者のほうね。

西村 土と風っていうのがあつて、村人は旅人をもてなして、そこでその情報を聞く。だから、土も大事だけど、風が吹いてくることも大事だっていう。そういう議論をしているらしいんだよね。

坂井 私は国学院院に入つて文献史学、あそこは基本文献史学。柳田も教えていたんだけど……、文献を書いているのは、さかのぼればさかのぼるほど数パーセントにも満たない人たちの歴史。1パーセントにも満たない人たちの歴史。歴史とは織田信長とか豊臣秀吉の歴史なのかっていう疑問を学生時代に持った。なぜ私がそういう気持ちになるのかっていうと、谷川健一さんっていう雑誌『太陽』の初代の編集長、その息子が、私の中学の同級生で谷川章雄っていう人がいたんです（早稲田大学をこの前、定年となつ

た）。

中学生のとき、その家に遊びに行くと、民俗学の本が部屋中に、階段にも本がずらりと並んでいて、その中の1冊を借りていくっていうのが楽しかった。玄関を開けると民俗学の風がびゅーと来る。で、なぜ興味を持ったのかというと、やっぱり英雄史じゃないんじゃないか。ほとんどの人たちが、その時代に何を考え、何を楽しいと感じ、何に悲しかったかということ。民俗学はそれを目指していたんじゃないかって中学生の私は思った。で、ずっとそのことが私の頭の中にあつて。それで、大学時代も民俗学のほうに興味を持って学んでいた。

今、デジタルアーカイブ、デジタルアーキビストの養成をやるうとしてるのは、一人ひとりの歴史を残せる初めての時代だから少し頑張ってみよう。民衆史が初めてできる時代。だから、こちらの青年館にも青年団活動をさかのぼれば、いろんな人たちの思いがあるはず。それをまとめて「竹下さんがね」とかいいう話じゃなくて。一人ひとりにいろんな気持ちがあつて、その子どもたちとか孫たちが、自分のじいちゃんや青年団活動を一生涯懸命やっていたことを引き継げば、一

企画3：〈対談〉未来展望 これからの社会教育に望むこと

番大事なことですよ、それが。

オールヒストリーで安倍元総理が何を考えたのかとか、吉田茂が何を考えた、それはそれで大事だけれども、私たち一人ひとりが自分たちのファミリーヒストリーをちゃんと残せない国では日本というものが消えてしまう。

中国には「どう案館」っていうのがあって、「どう案文書」っていうのがあって、一人ひとりのものが残っているんですよ。それで、□□さんなら□□さん、○○さんなら○○さんの記録が残されていて、そこに反革命分子とか書かれると、居住制限と職業制限が出てくるので、そこで名誉回復が必要になってくる。そこを外せば、職業の選択が自由になっていく。要するに一人ひとりの歴史を中国は残している。日本は残念ながらそのレベルには至っていないわけですね。いい意味でも悪い意味でも「どう案文書」っていうのはあるんだけど、私は、行政がやるんじゃないで自分の子どもとか孫に、じいちゃんはどうな思いで生きてきたんだよ、あんたのばあちゃんはどうなばあちゃんだったんだよとか、そういう話を残せる時代。それをつないでいけば民衆史になる。初めての時代を迎えてい

るんですよ。

西村 そうですね。でも実際のハードルとしては、個人情報保護ということを持ち出して、駄目だって言うんですよ。

坂井 そこは私の専門領域なので、本人がいろいろ言えればいいんです。

西村 そうなんです。

坂井 そこは誤解なんです。

西村 本人が自負できる情報なんだから、それはむしろ活発に交流してやっていけばいいと思うのです。(西村は「自負できるプライバシー、二次利用されない著作権」と言っている。)

テーマ12：「民衆史」としてのファミリーヒストリー

だれでも・だれもが主役の生涯学習

「公共性」と「個人」のバランス

坂井 その時に他の人にはわからないので、西村さんが言う個人情報で本人が了解しているということデータを埋め込む必要がある。著作権は、クリエイティブコモンズライセンスっていう、極めて不完全だけれども教育利用はOKですとか、うん、出所の明示をすれば、CC BYっていうマークを付けて、この写真は誰が提供したもののかっていうのを

表示すれば使っている。いくつかの種類があるんだけど、それは極めて不完全なだけれども、もっと不完全なのは肖像権と個人情報。で、個人情報について扱っているから、一律駄目じゃなくて。

NHKのファミリーヒストリーのように、自分たちがいいですよっていうものを放送しているんだからいいんですけれども、それをコピーして、コピーしていくとわからなくなる。だからデータに埋め込む方法がある。写真であればイグジフ(Exif)っていう埋め込みの仕方があるんだけど、そういうものを教えるのがデジタルアーキビストの講習会なんです。個人情報については「いいですよ」っていうマークを付けないと、素人には付け方がわからないんです。だから、おっしゃられるような個人情報の問題、肖像権の問題、写真を持っている人が著作権者じゃなくて、写っている人には肖像権の問題があるっていうことを教育機関の人たちがほとんどわかっていない。だから、西村さんが言うそういう個人情報の問題も、いろんな人たちと話し合いをして、それを歴史資産にする、共有財産にする、その仕組みをつくるっていうのが早急に必要なことだと思います。

西村 今のマークの付け方っていうのは、ぜひ普及させたいものですね。

坂井 クリエイティブコモンズライセンスは、デジタルアーカイブ学会をつくったときに、福井健策さんが言っていたんだけれども、私はクリエイティブコモンズライセンスだけではないんじゃないですか。

要するに、大工さん同士だったら自由に使っていていいという情報があるはずなんです。漁師さんだったら、メロン農家だったら。で、日本の職業分類っていうのは、総務省がものすごく素晴らしいものを持っている。世界の職業分類はあんまりないことない。日本標準でいいんじゃないかと思うぐらい立派なものがあるとするば、アドレスと同じようにコード化する。URLのようなコード化して、大工さんだったら「1612」とかそういうものを決めて、それで、その人たちは自由です。よってというマークを付ければ、いくつかのCCBYとか単純なマークじゃなくて、AIに「大工さんに自由に使っていていいですよマークを付けて」と言えば、URLをつくってくれる時代なので、個人情報についても了解済みで、二次利用、三次利用していいですよって

というのがコード化すれば、ずっとつながっていくので、そういうほうがいいんじゃないかと思います。

テーマ13..教育の蓄積から資源化

(社会で共有知 だれでも使えるものとして「アーカイブ化」へ もったいないをキーワードに)

西村 文献の研究で感じたのは、その要旨さえも著作権が発生するから使えないっていう。で、要旨を書いている人は、たとえば全文は嫌だけど、要旨はぜひ広めたいと思っている人はたくさんいると思うんです。だから、それはやっぱり要旨のところをそういうことを書いてもらう、あるいはそういうふうに最初から規定しておくことによって、特にデジタル化していれば交流は活発になると思います。

坂井 もったいないんですよ。

西村 もったいないね。

坂井 全ての教育がもったいないんですよ。資源化されない。この前中国へ行かれた新潟大学教授雲尾周さんが「坂井さんがずっと言っていることは、中国はやり始めていますよ」と。それはどういうことですかって言ったら、コロナの時代

のオンライン教育を全て残しているそうです。彼が行ったところの中国の担当者はその言われた。日本の大学はオンラインでへこたれていたけれども、オンライン、ZOOMであれば録画機能を使えば録画できるじゃないですか。あれで残せるわけですよ。そうすると、北海道大学に入った学生が、東北大学だろうが東大だろうが、琉球大学だろうが、その授業を取れるようにしていくという仕組みはできなくはないんです。教育の資源化。社会教育、青少年教育も、公民館の講座っていうのは終わったら消えちゃうんですよ。そうすると、茨城で考えれば水戸市の公民館、市民館でやった講座は、県北の常陸大宮では受講できない。オンラインで録画機能を使えば行政のエリアを越えられる。県も国も越えられる可能性はあるわけです。

西村 それは話す人が、それを歓迎するか、嫌がるか。

坂井 もちろんそうです。やっぱり20人だけで率直に話したいっていうことであれば、それは無理強いする話ではない。

西村 なるほどね。

企画3：〈対談〉未来展望 これからの社会教育に望むこと

テーマ14…大学の授業を教育資源として
学び方の変化

坂井 でも、大学の授業ってほとんどオープンなはずなんです。それを考えると、私は役所にいたときに佐藤次官に、課長ともども次官室に呼ばれて、情報化の青写真を描いてくれて言われて。あのことで頓挫したんですが、その時に高等教育局に迫ったのは、卒業単位124単位の規制を外してほしい、と。そうすると、言下に反対をするわけですよ。それでも結局30単位は他大学の単位を取れるようにしてくれました。現在60単位なんだけれども、60単位を法律上は他大学の授業を受けられるようになっていんです。そうすると、聖徳大学には管理栄養の学科があるじゃないですか、岐阜女子大学にも管理栄養の話があつて、同じカリキュラムが動いているので、あつちの先生の授業を取るっていうことは制度上できる。何が邪魔しているのかというと現場が邪魔しているんです。学生に選択肢を持たせて、この先生の話よりこっちの先生のほうがいいっていう学びの主体性を育てないで、定食だけを食べさせている大学でいいんだろうかっていう。

世界的にはミネルバ大学のように、先生のレクチャーが10分を超えると警告が発せられるわけですよ。あとは学生たちのディスカッションなんです。で、2年目からは世界中に寮があり、台湾にも日本にも出て行くんです。世界中の寮に泊まりながら、その地域のプロジェクトに参加しながらオンラインで勉強をする。先生の授業は10分。あとは学生のディスカッション。ただ座っているだけでは単位が取れない。事前に調べて学んで、それで自分の意見を言わない学生には単位を出さない。

寝ていて単位が取れる大学とどっちがいいですかっていう時代に入っているのに、コロナのときにオンラインですら反対する。それを私はデジタルアーカイブ化したかった。それで、他のところと競合する中で、先生たちが切磋琢磨をする。今は先生たちが守られ過ぎていんです。学習者が守られていない。だからそこで教育を資源化する。資源にして、それを利用者が主体的に選択する能力を培っていくことによって、社会で主体的に関われる人材を養成する。その仕組みを残念ながら日本は政策的に考えていないとすれば、社会教育行政の講座だけをそ

うするっていう発想ではないと思う。

西村さんが青少年活動で一生懸命やっている、そういう人たちの話をどんどん日本中、世界中で学べる社会をつくっていくことのほうが現実的になったんじゃないかと。

西村 そうですね。

テーマ15…社会教育、生涯学習の現代的な課題としての「グリーンフケア」

大事な人を失ったときの教育

坂井 もう一つ、生涯学習、社会教育、青少年教育が見落としていることが今でいうグリーンフケア。要するに大事な人を失ったときの教育っていうのがある。亡くなられた伊藤俊夫先生（元文部省社会教育官、青少年教育課長、東京家政大学教授）から昔、電話があり、社会教育主事講習に死の準備教育を入れられないかという。死の準備教育っていうのを、上智大学のアルフォンス・デーケンさん、その時は教授でその後学長になるんだけど、死の準備教育というのをデーケンさんが言っていると（『老いと死をみつめて 老いの生き方Q&A』アルフォンス・デーケン編著 同文書院）。これは社会教育の中で重要になってくる可能

性があるので1コマ入れてくれと。それで、講師室でアルフォンス・デーケンさんと話したらほんとに面白い。誰にでも必要なことなのです。そのことがずっと頭の中にありました。

私は5年間パートナーの介護をして、自宅が好きな人だったんで自宅で亡くなったんです。難病だったけれど穏やかに亡くなって、やれることはやったかなって思ったんだけど、その後にはじめと来るんです。失ったときの衝撃っていうのはじわじわ来るんだなと思ったら、介護してくれた人と、それから訪問医療をやったお医者さんが来てくれたんです。

お医者さん、この人は徳島大学の医学部からハーバードに行つて認知症の勉強をして帰ってきて、いろんなことをやって、たどり着いたのが訪問医で。3人から始めて、今、何十人のスタッフを抱えているんだけど、その先生が来る。亡くなった1カ月後に看護師さんと2人で来たりして。それで私と話をして、ずっと私を観察して。

医療とか介護の人たちにグリーンケアって言うとなんかわかる。要するに、医療と介護が届いていないところを、私た

ちは何なのかっていうのを自分たちで勉強会をしているんだと。明日(3月20日)、NHKのBSで朝8時から、郡上八幡に住んだ近藤正臣さんが妻を亡くして一人になったときのことを放送する。栗原はるみさんが夫を亡くした番組がNHKスペシャルになる。誰にでも起きること。上智大学にはグリーンケア研究所がある。でもプログラムがあまり豊かではない。それで、私はグリーンケアと生涯学習、青少年教育、社会教育とをつなげた。それを沖縄でやりたい。西村さん、やらない？

西村 ちよつと関心があります。

坂井 だってね、こんなに音楽が大事だとか、1日10キロぐらい歩くとか、歩くことによる自分のケアができているとか、写真を撮るっていうことで自分がイメージケアをしているっていう感覚が出てくるんだけど、何にもない人が孤独になるんです。家の中に閉じこもるわけです。それをやっぱりあなただけじゃないんだよっていう形で、スポーツをすることによってケアになる人もいるし、絵を描くことによってケアになることもある。

西村 それは自助グループみたいなこと

ではないんだな、きつと。

坂井 グリーフを感じた人たちが集まって、こうやってディスカッションをするっていうことも意味はある。それを上智大学は一生懸命やっている。けれども、グリーンケアを抱えている人が地域の草野球とかソフトボールに行くことによって、新たな人間関係をつくったり、今までの関係をもっと深くしたりっていうことで、社会教育、青少年教育が今までグリーンケアとしての社会教育、青少年教育のプログラム開発をしてきていなかったっていうことに気が付いてほしいと思っている。

私は社会教育研修所で、西村さんをはじめ、難しいことを言う井上講四さんとか(笑)、いろんな人を許容する文化っていうのがあった。私はやはり社会教育研修所で西村さんが来られる前にいた、それこそ福岡強さんとか小山忠弘さんとかね。それから先輩方に宮本一さんとか、三浦清一郎さんとか素晴らしい先輩たちがいたわけです。そういう人たちから社会教育研修所は大事なものだという考えをここんことと教えられていたので。あそこはとてとても大事な場所だと思ってくれども、もうそこに頼り切った社会教育って

企画3：〈対談〉未来展望 これからの社会教育に望むこと

いうことじゃないことを考えると、西村さんが前から言っている仲間と家をつくる（コーポラティブハウス）っていうことも一つの大きな課題じゃないですか。

宮坂広作さんが、原発をなぜ社会教育で地域課題として取り上げないのかって言われたように、地域の課題をもっとストリートに取り上げていく。南海トラフのときのダメージをどうやってケアしていくのかっていうことを今のうちから考えておくことが社会教育、青少年教育の人たちがやってほしいことなんです。

西村 なるほど。

テーマ16…個人と組織の関係

組織を動かす、揺さぶる意味

モデル事業の「弱点」克服に向けて「やってみる」

坂井 やることは無数にあるんですよ。

西村 そうだね。

坂井 でも、体は一つなので。

西村 うん、そこは一つどこかについていうことになるだろうな。そこから広がるっていうのもあるだろうけど、活動が。

坂井 雑誌『社会教育』、これからの雑誌の在り方とか可能性っていうのを考えて、できない理由を考えるのではなくて、

できる理由を考えて、雑誌『社会教育』に「こういうことはできませんか」っていう提案を若い人たちがどんどんしてくれることを私は期待しますね。

西村 その時に個の発信っていうのかな、個人の個っていうことがしやすい状況なはずなのに。例えばSNSでもそうだし。でも、現実にはむしろ前例踏襲。「生きる力」を調べてみると、最初に出たころは国立青年の家とか少年自然の家とかがテストケースみたいな感じで、とても生き生きとしたいろんな方面からやっていました。それが1年2年して集約して国からの方針が出されると、全部それを踏襲するような動きになっちゃう。見ているとね。だから、それで力がなくなっていく。

個人や組織、施設でも、個性っていうものがもつとあっていいはずなんです。例えば、坂井さんがいた那須甲子のあの所長、あの人もすごく個性的にバリバリやったと思うんですが。

テーマ17…少年を「放牧」する

少年自然の家の「基本理念」

坂井 国立那須甲子少年自然の家の創設のときに、天城勲先生（元文部事務次官、

全日本社会教育連合会会長）が、少年を「放牧」してくれって。後から人間を放牧するっていうのはいかなものかって批判されるんだけど、天城先生の言いたかったことは、大人が用意したプログラムを消化するだけでいいのかと。もつと子どもたちの自主性を重んじた運営をしてくれよということが天城先生の趣旨なんです。

それをさらに、千葉大学の坂本昇一先生が、付属学校の校長も併任したときに、那須甲子少年自然の家と千葉大学の付属の先生が話し合ったプログラムを全部破壊した。子どもたちが山に登りたいって言うのか、川遊びをしたいって言うのか、スキーをしたいのか。季節によってプログラムは変わるけれども、子どもたちが着いた後に何々をしたいっていうことに対応してくれって言われたのです。

そうすると、スキーの数は幾つしかないとか、雪の中、ウサギの足跡を見つけて行くグループに貸し出す雪靴は何足しかないとか。貸し出しを担当する私としては、いきなり300台のスキーと云われてもそれは調整しないといけない。他の学校も入っているのだからそれは難しい。でも、その発想は正しいなど。

西村 Y M C A のキャンプでは、各グループのリーダーとメンバーで何をするかを決めていきますね。

坂井 那須甲子もやってきたんです。で、朝日を見たいって言えば起床時間を変え、夕陽を見たいと言えば登山をして、夕陽がきれいに見えるところに行つて、朝の集い、夕べの集いに参加しなくてもいいという。

西村 そうか。

坂井 天城先生や坂本昇一さんに触れた幸せはあるんです。当時の所長も課長たちも、大変な思いはしたけれどもやはりそれは正しいことだったの。これを1年目に「やれ」って言われたから困ったわけですよ。10年経てばスキーだつて台数は増えていくので実現するはずが、運営が、西村さんが言われるように非常に固定化していつてしまつて、当初のそういう人たちの思いを残念ながら実現できていないところはあると思います。

西村 その当初の、元気のあつた考え方、そういう気分、そういうものが萎縮しているような気がします。なぜだか分からないけれども。

坂井 組織つてそういうものじゃないか

と思います。つくるとは比較的簡単、ただ継続して良くしていくつていうところが難しい。これは人間のさがのような気がする。

テーマ18 自主ゼミの指止まれ方式

社会教育の学び方のひとつ

坂井 私は「勝手連」じゃないんだけれども、その時に必要なものに、この指止まれつていうやり方が。スタンフォードに行つたの。で、スタンフォードの人が言つたわけじゃないんだけど、講座を組むときは、この指止まれ方式なんです。このテーマでこの先生に習いたい。何回の講座をやりたい。で、それを提案して、それに賛成の人、参加する人、この指とまれで20人以上集まれば講座が開かれる。それを私は全国で言うんだけど、どこも日本でやらない。沖縄でやろうと思つてゐるんだけど。

西村 僕らが学生のころ、自主ゼミつてあつた。

坂井 そういうものを社会教育の行政の講座でも、20人のところ3名しか集まらなかつたとか、それで評価する。そういうことじゃなくて、やはり主体は学習者であると。で、学習者は決してばかじゃ

ないので、お客さんあつかひしていればお客さんになる。そうじゃなくて、あなた方が主体なんだよというふうにした講座をスタンフォード大学がちゃんとやつてゐるんですよ。単位ではない。ディグリー(学位)も出してゐたんだけど、企業150社に対して衛星通信で、その後地上回線で。日本の人たちもそれを受講して取つたりして。それとは違う自主的な生涯学習も行つてゐる。

西村 ディグリーつて何の？

坂井 修士。修士を取つて講座の一方に生涯学習講座がある。そういう自主的な生涯学習講座で、この指止まれ方式だから満足度が高い。参加意欲は高い。

西村 先生も選ぶのか。

坂井 先生も選び、この先生に習いたいものはこれだつていう。それがもつと広がつていいはずだよ。

西村 それは嫌な先生もいるだろう。

坂井 嫌な人はやらなきゃいい。

西村 そうだよな。

坂井 私は常磐大学で生涯学習センターに對して、そういうのをやつたらつて言つただけけれども、先生たちから大反対。

西村 あ、やつぱりね。困つたもんだな。

坂井 だから既存の組織をそういうとこ

企画3：〈対談〉未来展望 これからの社会教育に望むこと

ろに「あんたたち、おかしいじゃない？」
 言っても、「おまえのほうがおかしい」
 という水かけ論になってあまり生産的
 ではないので、各地で面白いねっていうこ
 とを、西村さんのように自由な発想でや
 って、それをつなげる。距離に関係なく、
 もしかするとオンデマンドにすれば時間
 軸も超えられる。その手段を私たちは
 手に入れたので。

ZOOMの会費を私は今ドル建てで出
 して、日本法人がないときから会員なん
 だけれども、2万8000円ぐらい、年
 に出しているわけです。行政はそうい
 うものを支援すればいいんです。そうい
 うところに申請して、年間何講座ぐら
 いに使いますって審査してもらえばいい
 で、行政がやらないのをけしからん
 言っている時代はもう過ぎたような気が
 する。

西村 もう一方の側面から言えば、き
 とその中で自分の個を発揮して、何か革
 新的なことをやってみたっていう人は
 いるはずだと思うんです。で、それはで
 きるはずだと思う。

坂井 それが、個で考えるという話なの
 で私もそうだと思うんだけど。いろ
 んな地域に行くって個が孤立するん

よ。大阪や東京っていう大都市のいいと
 ころは、演劇のこの部分を好きだってい
 う人、この指止まれている感じがやる
 と人は集まれるんです。それが本当に人
 口減の地域で、非常に広い分野のこと
 っていうのを実現しようと思ったらそれは
 オンラインなんです。

西村 そうだね。

テーマ19…成人学習のプログラムとオン
ライン活用

坂井 ここに着目したときに、ものすご
 くバラエティに富むことになるという
 ことを感じたのは、私は社会教育研究所
 で、青山学院大学の稲生勁吾先生の研究
 室に成人学習の学習課題を整理してくだ
 さいっていうのを所長が出したら、分厚
 い資料が来たわけです。成人教育だけで
 こんなにあるのか。青少年教育とか高齢
 者教育を入れたらもっと増えるよね。そ
 うすると個に応じたものって考えれば、
 ものすごい分量になるので、本当に学び
 たいことを学ぼうと思ったら、やっぱり
 オンラインを使わない手はないんじゃない
 かと思います。

西村 個別最適な学習って言われるけれ
 ども、同時にその個人が地域の中にはい

なくてもオンラインでつながって、オン
 ラインでコミュニティができれば、それ
 もいいと思う。

坂井 宮城県に住んでいたときに、和太
 鼓をやる人がいて、地域の子どもたちを
 集めて元気に和太鼓を教えていた。だか
 ら集まると和太鼓の話。それから、犬を
 農地の広いところで走り回れるようにし
 ていたので、子どもとの会話が尽きない
 と。家族と夕飯を食べながら和太鼓の話
 と犬の話でずっと話し続ける。わが家は
 そういう食事風景なんです。それはそ
 れでいいなと思ったんだけど、本当に
 人口の少ないところに行くと、そうい
 う頑張っている大人とか若者がいる。そ
 うすると、そのグループには、和太鼓だ
 けではなくてクラリネットをやりたい子
 もいるかもしれない。絵を描く子も和太
 鼓も、天文、星が好きな子もいて、さま
 ざまなことを深めながら、ある意味、和
 太鼓でつながっていくっていう姿が一番
 いいような感じする。

西村 なるほどね。

坂井 だからつながることと個に応じた
 学習を実現するということ。西村さんと
 私はそうだねって思うんだけど、そう思
 ってくれない人が多い。

西村　自分のところで囲い込もうとする
とそうなたちやうのかな。囲い込みきれ
ないよ、そんな。だからもつと自由にい
ろんなところに発展してもらっていいわ
けで。まちづくりだって、防災にいく人
もいれば資源の問題にいく人もあつて、
そこで何かつながつているものがあると
いい。

もう一方でよく聞くのは、たとえば障害児の団体。目が不自由、耳が不自由、あるいは違う障害。そういう人たちはその団体の、自分のところが大変だ、自分とこの手当が大事なんだというところでクローズドになっちゃう。つながれるっていうことに慣れていないのか、自分のところの目先だけになっている。そういうところをもっと広げていけるようなきつかけが必要だと。

坂井 まさに西村さんの発想はそういうところにあるんだろうなと私も思いますが。人間、全ての社会的な課題に対応できるわけではなくて、自分が深く関わっていることのいくつかをもつて生活していくということも大事なんだけれども、常に自分たちの問題以外にも社会的な課題がこんなにあるよねっていう話を聞ける状態にすることが大事だと思っています。

す。だから、おっしやられるように視覚障害者、聴覚障害者、それから発達障害、障害っていつでも一つだけじゃないし程度もいろいろある。そういう中で、保護者からすると、自分たちが年をとっていなくなつたときにこの子がどうやって自律的に社会で生きていくのか、ものすごく不安を抱えている人たちがいる。

西村　そうですね。

テーマ19 デジタルアーカイブ

YouTubeの活用

坂井　そこから学べる社会になってきているので。私の専門にしているデジタルアーカイブというと、YouTubeとかnoteとか、公開するところをもっと社会教育をやっている人たちが活用してほしいと思う。一方でそれは公開情報で保存していく。情報でいくと、光ディスクのM・D・I・S・Cに私は保存してほしいと思っています。いるんだけれども。

それから、著作権の問題で、YouTubeを他の利用として使いたいっていうことについても自由に使っていいですよ、ということをちゃんとYouTubeで表現してほしい。表現することの知識を得てほしい。そうすると西村さんのおっしゃられる

るようなこと（「自負できるプライバシー、二次利用されたい著作権」）が実現できる。他にもいろいろな問題で頑張っている人たちがいるっていうのは励みにもなるんです。だからその人たちが、自分たちがこんなに一生懸命やっているのに社会は応援してくれないのかっていう孤立感を感じずに、いろいろな人たちが努力しながら少しずつ社会を良くしているっていうことに気が付くと、孤立感、孤独感は緩和されるような気がする。やっぱり一生懸命やると、孤立感、孤独感を感じるっていうところで挫折するとか心にダメージを受けるということにながってしまうことがあるので、いろいろな人とつながれる仕組みをつくってほしいですね。

テーマ20…必要課題と要求課題と分ける時代ではない

大事だと思ふものに疑問を持つことも大事
西村 国社研にいたときに、学習ニーズ
(Need) とウォンツ (Wants) が違うん
だっていう話があつて、必要課題の学習
を入れなきゃいけないと。

坂井 必要課題と要求課題。新堀通也（1968年、文部省社会教育官。19

企画3：〈対談〉未来展望 これからの社会教育に望むこと

72年、広島大学教育学部教授）先生ですよね。

西村 これはやっぱり違うんだろうなと思います。坂井さんともよく議論したけれども。

坂井 私は大事だと思うものに疑問を持つことも大事だと思うのです。必要課題と要求課題っていうことを新堀先生が言っていたときに、「要求課題はわかる。いろんな要求課題があるよね。で、必要課題を、行政で、学習したくなくてもこういうことは大事だよ、市民として大事だよ、という課題を必要課題と言うんだよ」というときに、「要求課題をものすごく羅列したら、その中に必要課題がないなんていうことがあり得るのか」っていうのが私の疑問だった。

で、そんなに行政が賢いのかと。上から目線で、市民が気付いていなくて学ばなければいけない課題がこんなにあるじゃないかって考えることは不遜じゃないか、本当に必要課題をずらつと並べたら、行政が気付いていない問題で、市民が全員学んだほうがいいことっていうのはあるんじゃないかと。だから必要課題と要求課題じゃなくて、人間の課題なんですよ。行政として取り上げる課題は何なの

かっていうならわかるんだけど、人間としての必要課題と要求課題に分けるのは誤りじゃないかって。

常に私は「Yes」の議論。国社研に行つて初めてあったことは、伴恒信さんと私たち若い職員が会議に出ていって賛成の意見を言ったら、当時の課長が、2回目からおまえら来るなつて。賛成からは見えるものが少ないつて。たとえば自分が賛成だとしてもどこに穴があるのか、どこが見えていないのかをおまえたち若い人間が言わないでどうするんだ、それを言えるようになってから会議に参加しろつて言われて。なるほどと思いました。だから、誰か権威者が言ったことを鵜呑みにしないつていう癖は社研で。

西村 それは大事だな。

坂井 好かれないけどね。組織の中で、この会議を主導している人に、「いいえ、こういう見方もあるんじゃないですか」つて言つて喜ばれるような度量のある人つて極めて少ない。

西村 そうだね。

坂井 けれども私はずっとやってきたつもり。もうそれは社研のおかげ。

西村 横浜で社会教育の専門職じゃないけど行政職員としてやっている職員が、

「はしごを登っていると振り落とされる。それだけはやめてほしい」と。はしごを外してくれてもいいから、自分の責任でやらせてほしいつていうことがある。例えば企業だったらそれをやるだろう、それが行政でもできるつていうことが大事じゃないかな。

テーマ21…映画教育から視聴覚教育へ、さらに情報通信技術、人工知能の登場

西村 そうね。一人ひとりのニーズを大事にして、それに対応できるインフラもできている。その線でいくと、過去に「学歴が低い人は生涯学習をしない」、こういうふうなことが言われていたけれども、それは今の話で言うと、もつとその人の学習ニーズに迫らなければいけないんじゃないか。人間が生きている限り、さっきのグリーンフケアもあるしね。そういう生活課題、学習課題がない人なんていないよつていうところから考え直さなきゃいけないと思います。

学習好きの人だけ集めてよしとしている現状では、「誰一人取り残さない」どころじゃないつていうことだよな。

坂井 数カ月前に吉祥寺に行って映画を見たの。パレスチナ人のお医者さんが自

分の娘を空爆でイスラエルに殺されているんだけれども、イスラエル人にも医療行為をずっとやり続けて。「私は憎まない。相手を憎んだところからは始まらない」と。おれには絶対できないっていう気持ちを持っていったんだけれども、その映画館は満員なんです。やっぱり、いろんな人がいろんな気持ちで生活をしているっていうことを考えると映画を見ることが、ものすごく人にインパクトを与える。それはテレビの力もあるけれども、映画の力ってまた違う面がある。足を運んで映画を見るっていうことを考えると、昔の人たちは映画を元に勉強会をやっていたんですね。だから、私たちは1人で映画を見るけれども、そういう勉強会、青年団の活動の中で、昔は映画を見るっていうのもあって、一緒に映画を見る。視聴覚教育で映画を大事にしている意味は、私はあるような気がする。

西村 神山順一先生が、国社研の講座で「皆さん社会教育主事」は、映画を見ていますか」と問いかけた。映画の場面から各自



がいろんなことを連想したり思ったりしている。これが大事。これを学びなさいっていう話じゃないところに意味があるんだな。

坂井 で、みんなで話し合うと、自分が気付いていないところを教えてくれる。仲間っていうのはいかに大事なのかっていうのは、そういうところからつながれる。

西村 そうだね。だからオンラインでも結局、その人数だけに狭まっていく話ではなくて、むしろ一人ひとりが発展していく。それは他者と出会うことによって自分の枠組みが広がっていく。まさに学びの大事さを言っているんだよね。で、それは学習に疎かった人は生涯学習をやらないう傾向があるなどという、ネガティブな悲観的なことを言っていたのではつかめないことだと思うんです。

もっと楽しく一人ひとりが今の状況とかネットワークを使って活躍する。一人ひとりが個性を発揮して発信して交流していく。自分が深まってつながって広がっていく。深まる、つながる、広がるということ、それが大事ななだと思うね。坂井 灰谷健次郎という作家が『太陽の子』とか『兎の眼』とかああいうものを、

教員になる人、社会教育をやる人たちはぜひ読んでほしいと思うけれども、そうするとだんだん学びの課題が見えてくるんです。

なぜ沖繩の子が大阪にいたり神戸にいたりして、こんな差別の問題が出てくるんだらうっていうところに、『太陽の子』とか『兎の眼』は映画化されているので、本をあんまり読まない人でも映画が持つ力で、学びの課題が見えてくるんだよね。沖繩の問題。沖繩戦って一体何だったんだらうと。そういう学び、学校で決められたことを学ぶことが学びだっていう人から離れて、そうじゃなくて学びっていうのは自分で見つけて自学自習する面白さがある。学びが得意な人ばかりを相手にする学びじゃない。

西村 そう言えば、さきに職業教育のところでも述べた「クドバス」っていう、自分たちで出し合ってつくっていくという、構造化をしていくというところにはくはすくはまっているんだけれども、その仲間の先生たちがもういい年なんですけれども、スマホの漫画を読んでいるんですよ。いい漫画だと思って、アニメ化されたりして、たくさんいいものがあるねって話題になった。僕はあんまり

企画3：〈対談〉未来展望 これからの社会教育に望むこと

そういう感じを知らなかったんだけど、宝物はたくさん転がっているんですね。「学び」を広くとらえる必要がある。

先ほどの神山順一先生の「皆さん社会教育主事は、映画を見ていますか」という問いかけに対して、みんな見ていなかったんだよね。何でだろうね。一般の映画などを見ている社会教育主事は逆にあんまり大きい顔をできなかったのかな。もっと真面目な仕事、与えられたことばっかりやっている人がいいってことになっちゃうのかな、組織では。

テーマ22…生涯学習社会の構築に向けて「温故知新」全体を見る

坂井 生涯学習社会。井内慶次郎さんに言われたのは、まずは鳥瞰的に全体を見るところから始まって、それが見えたら地上の虫になって這いずり回って一つひとつの課題をクリアしていったって、と言われたことが一番わかりやすいんです。

全体像を鳥瞰的に言え、もう社会教育行政、生涯学習行政が担える部分というのは非常に小さいものである



ということを行行政関係者もそれから市民も理解する必要があるんじゃないかと。守備範囲が非常に狭いついでことで非難していてもあまり生産的ではない。でも、担当者は自分たちがやっていること以外に市民がいろんな積極的な学びをやっている人たちがいる、自分たちは何が支援できるんだろうということを、社会教育、生涯学習の行政として鳥瞰的に見て支援策を考えてほしい。学びというのは、自分で見つけた学びを大事にする社会が生涯学習社会であってほしいなっています。

西村 紙ってというのは、僕はすごく大事な媒体だと思うので紙は大事にしてほしい。やっぱり社会教育っていう紙を必要だっている人はデジタルの中にもいるから、デジタルの人と手を組むことを考えてほしいなっていう感じはする。

今日の情報環境の驚異的な発展は、個人発信型のインタラクティブなコミュニケーションを可能にしています。これまでの「教える人↓学ぶ人」という一方通行の学びではなく、1対N、N対Nの「学びあい、支えあい」という相互関係の学びの可能性が広がっています。これは、HAVE（資格や財産を持つ）からBE

（人間らしく存在する）へ、BEからWITH（共に生きる）への生涯学習の発展を支えます。

そして、情報技術の発展はわれわれにわくわくするような楽しさを与えてくれます。梅棹忠夫が過去に追求し、普及を目指した「知的生産の技術」が、今日の情報技術によって誰でもコスト良く、タipy良く使えるようになっていっています。情報技術の上手な活用は人々のQOLを高めることにつながります。そのとき大切なことは、支援者のほうも、わくわくしながらこのような楽しさを味わうということです。そのためには、情報技術を物神化して崇拜したりせずに、いわば楽しんで「使い倒す」というアマチュア精神が必要だと思っています。

近藤 創刊950号の対談。デジタルを活用しながらの「温故知新」。2029年10月号が1000号になります。できれば続けたいというところでやっています。

坂井 ありがとうございます。

西村 ありがとうございます。（終了）